

私が学校の先生になったわけ～青春の後悔～

校長 栃倉 和則

「校長先生」って、とっても偉い人のように思われているのでしょうか。そんなことが、時折感じる距離感の理由なのかなと。確かに立派な先生はたくさんいらっしゃると思います。でも、少なくとも私は違います。皆さんの手本になるような人ではありません。

私の高校時代はとても青春などと呼べる類のものではなく、むしろ黒歴史で、赤面して穴に入りたいようなことばかり思い出されます。恥ずかしい話ですが、不本意で入った高校に幻滅、勉強に打ち込むこともなく、部活動も途中で辞めてしまいました。自分が悪いくせに呟いてばかりの三年間、何かに一生懸命に取り組むこともありませんでした。実はこのことこそが、私が教職を志した理由なのです。若い世代に、自分のような後悔をしてほしくないという思いです。

高校生が大きな声で汗を流して走る姿やひたむきに取り組む姿を見ると涙が出ます。教員になりたての頃、ひょんなことからそれまで経験がなかった水泳部の顧問を努め、スイミングスクールに通い、高じて指導員の資格まで取得し、いまだに競技役員を辞められないでいます。高校生たちが何かに打ち込む姿を見守りたい。生徒たちが三年間という限られた時間を精一杯満喫し、何か一つでも多く成し遂げてもらえるように、環境づくりのお手伝いをしたい。そんなことが、私に与えられた使命だと受け止めています。

サミュエル・ウルマンは、「青春とは人生のある期間ではなく心の持ち方をいう」と言っています。松下幸之助も「青春とは心の若さである。信念と希望にあふれ、勇気にみちて、日に新たな活動をつづけるかぎり、青春は永遠にその人のものである。」としています。もしそうであるなら、今が私の青春なのかもしれないし、まだまだこれから若さを楽しむ心を持ち続けたい…と、不遜にもそんなことを思わされています。

*Touch The Sky! TOYOTAMA!*